

国立国会図書館



特集 資料に見る日仏交流の歴史

電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」

フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」

国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」

「あの人」に会えた！ 企画展示「あの人直筆」報告

2015.2

No. 647

CONTENTS

02 孝経小解 複製本と相違のある原本

今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 特集 資料に見る日仏交流の歴史

05 電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」

08 フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」

10 国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」

14 「あの人」に会えた！ 企画展示「あの人直筆」報告

18 「あの人直筆」誌上フロアレクチャー

23 関西館小展示の開催とその「再利用」

17 館内スコープ

Facebookはじめました 国立国会図書館の展示
(東京・関西)

26 本屋にない本

- 「知られざる世界への挑戦 航海、探検、漂流を記した書物百選 学校法人京都外国語大学創立65周年記念稀観書展示会 展示目録」
- 「館長庵野秀明特撮博物館 ミニチュアで見ると昭和平成の技」

28 NDL NEWS

- 第5回科学技術情報整備審議会
- 韓国国会図書館、韓国国会立法調査処との業務交流(第5回)

30 お知らせ

- 放送開始90年記念・脚本アーカイブズ・シンポジウム「脚本アーカイブズ」の新たなステップへ—未来に向けた保存と利用
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

特集 資料に見る日仏交流の歴史

✦ 電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」

✦ フランス国立図書館の電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」

✦ 国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」



国立国会図書館は、日本とフランスの交流の歴史をテーマとする電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」を2014年12月に公開しました。また、12月11日には、これを記念して、フランス国立図書館からヴェロニク・ベランジェ氏をお招きし、在日フランス大使館の後援を得て、国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」を開催しました。本号では、この電子展示会とシンポジウムについて、特集します。

(国立国会図書館展示委員会)

国立国会図書館は、2013年3月にフランス国立図書館との間で、図書館活動の各分野における包括的な協力協定を締結しました。協力の一環として、両館の所蔵資料を基にした共同電子展示会を実施することで合意し、作成に取り組んできました。そして、昨年12月に、国立国会図書館が電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」を、フランス国立図書館が電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」をそれぞれ公開しました。

日本とフランスの交流は、安政5(1858)年に締結された日仏修好通商条約により国交が開かれて以来、150年以上にわたって積み重ねられてきました。日本は、近代化に不可欠な技術や制度をフランスに

学び、芸術や生活スタイルの面でも大きな影響を受けてきました。また、フランスでは、日本の美術・工芸が愛好され、背景をなす思想や文化についても深く研究されてきました。戦争による中断を挟みつつも、両国の間には、今日に至るまで互いの文化に対する憧れと関心が持続してきたと言えます。

2014年には、長年にわたり日仏の文化・学術交流の拠点となってきた東京の日仏会館が創立90周年を迎え、「日仏文化協力90周年」を祝うさまざまな行事が開催されました。このような記念すべき年に、両国立図書館が共同で電子展示会を作成・公開したことは、大変意義深いことと言えます。

電子展示会

「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」



この電子展示会では、19世紀半ば以来の日仏両国の交流の歴史を反映する、約200点の資料を掲載しています。ここでは電子展示会の構成に沿って、その内容を簡単にご紹介します。

序 日仏交流の幕開け

幕末の日仏修好通商条約が両国の国交の始まりであったことは、すでに述べたとおりです。江戸幕府内では、勘定奉行・小栗忠順^{ただまさ}らを中心にフランスへ接近を図る動きがあり、駐日フランス大使レオン・ロッシュの協力を得て、横須賀造船所が建設されます。また、幕府はロッシュの勧めに従い、1867年のパリ万国博覧会に使節を派遣します。序では、鎖国下で描かれたナポレオン・ボナパルトの肖像や、来日したフランス人の動静を記した町奉行所の記録、日本最初の本格的な仏和辞典、パリ万博参加者が持ち帰った写真などを紹介しています。



資料紹介

Poèmes de la libellule
(1885)
西園寺公望が、フランスの女流作家ジュディット・ゴーチエとともに古今和歌集を抄訳したものの、『蜻蛉集』の和名がある。挿絵は山本芳翠。
<請求記号 KH9-B13>

第1部 日本の近代化とフランス

第1章 政治・法律

近代日本の法律や制度については、一般にドイツの影響が強いと言われます。しかし、特に初期の段階においては、フランスに学んだことも多いのです。この章では、明治初期に翻訳されたモンテスキュー、トクヴィルら思想家たちの著作や「東洋のルソー」と称された中江兆民の関係資料、民法典の編纂にあたったギュスターヴ・ボアソナードが残した草案などを紹介しています。



資料紹介

『東洋自由新聞』創刊号 (1881)
中江兆民、西園寺公望らがフランスから帰国後に創刊した、急進的自由主義に立つ新聞。自由民権運動に影響を与えた。
<請求記号 WB43-169>

第2章 産業

幕末にフランスの援助で始まった横須賀造船所の建設は、明治政府に引き継がれ、当時国内最大の官営工場として産業の近代化に多大な影響を与えました。昨年6月にユネスコ世界文化遺産に登録された富岡製糸場も、フランスからの技術移転で建設されています。この章では、横須賀造船所の附属教育機関で使用された教科書や富岡製糸場の女工による回想記、幕末にパリ万博に派遣された日本資本主義の父・渋沢栄一の日記などを紹介しています。

第2部 文化の日仏交流

第1章 文学

明治以降、多くの作家たちがフランスへ渡航し、その体験を作品に残しています。それらの作品は、日本人のフランスへの憧れが形成される上で決定的な役割を果たしました。また、フランスの文学作品も多数翻訳され、日本の近代文学に大きな影響を与えました。この章では、永井荷風『ふらんす物語』、与謝野鉄幹・晶子『巴里より』、島崎藤村『平和の巴里』など日本人作家の作品のほか、日本で最初にフランス語原典から翻訳された文学作品である川島忠之助訳『八十日間世界一周』や、来日したフランス人作家ピエール・ロチの作品などを紹介しています。



資料紹介

Dodoitsu (1945)
1921年から27年まで駐日フランス大使を務めた詩人ポール・クローデルの翻案による日本俚謡集。挿絵は、在仏の画家ハラダ・リハク。
<請求記号 KR153-A54>

第2章 芸術

明治時代になって西洋美術の本格的な受容が始まります。芸術を志す人びとを惹きつけてやまなかったのが、芸術の都パリでした。この章では、黒田清輝、浅井忠、中村不折、萩原守衛らフランス留学を経験した芸術家たちの作品を多数紹介しています。また、藤島武二、橋口五葉らの挿絵やフランスに日本美術を紹介した画商・林忠正の活躍、フランス音楽の受容などについても取り上げています。

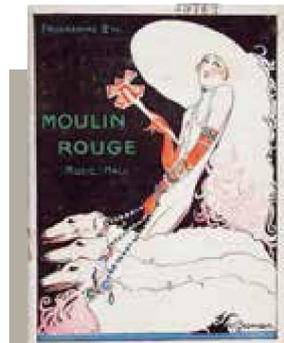
人びとの交流 (コラム)

日仏交流は、両国間を往き来した多くの人びとによって担われました。このコラムでは、西園寺公望、ポール・クローデル、九鬼周造、大杉栄、きだみのる、加藤周一など、両国の文化の深い理解に達したと思われる人物を取り上げます。彼らは、フランス(日本)を体験することで、自らの感性や思考を大きく変容させています。人物相互の関係にも着目しながら、関係資料を紹介しています。



「^{うま}美し国」フランスへの憧れ (コラム)

フランスは、近代日本において、生活スタイルやサブカルチャーの次元でも、強い憧れの的となってきました。このコラムでは、料理、ファッション、映画、レビューとシャンソンの4つの分野におけるフランスの影響を紹介しています。これらの分野におけるフランスの影響は、今日に至るまで続いており、日本人の抱くフランスのイメージは、「美し国」“Douce France”であり続けてきたのです。



資料紹介

Moulin Rouge music-hall
(1925)
ムーラン・ルージュにおける当時のスター、ミスタンゲット主演レビューのパンフレット。蘆原英了コレクション所収。
<請求記号 VA251-402>

電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」の作成

国立国会図書館におけるこの電子展示会の作成作業は、2013年6月にスタートしました。国立国会図書館の電子展示会は、特色あるコレクションの存在を前提に企画されることが多いのですが、今回の場合、テーマに関係する資料群が事前に特定されていたわけではなく、ひとつずつ資料を選定するところからのスタートとなりました。

まず日仏交流史に関する参考文献を読み進め、分野間のバランスや全体の規模を考慮しつつ、構成と出展資料を決めていきました。

最終的には、「政治・法律」「産業」「文学」「芸術」の4分野を中心とし、2部4章の構成を定めました。また、江戸時代における交流や軍事に関する話題、パリ万国博覧会等、上述の4分野に収まらないトピックについては、別に「序」を立て、さらに人的な交流に着目したコラムと、生活スタイル、サブカルチャーに見られるフランスへの憧れを取り上げたコラムを作成することとしました。出展資料として計約200点を選定し、これらに付ける解説は分担執筆しました。なお、構成や資料の選定については、専門家の立場から中央大学の三浦信孝教授に助言を頂きました。

電子展示会ウェブサイトは、日本語・フランス語・英語の3つの言語で提供することとし、洗練されたデザインとわかりやすいナビゲーションを心がけました。また、参考文献リスト、関連年表、人物索引を設け、調べものに役立つよう工夫しています。特に人物索引には、500名近い登場人物をすべて収録し、その多くには肖像を掲載して眺めて楽しめるものになっています。トップページには、フランス側の電子展示会へのリンクを設けています。

電子展示会「近代日本とフランス」

<http://www.ndl.go.jp/france/>



トップページのデザインについて

電子展示会のトップページは、地球をイメージした球面の向こう側に、エッフェル塔やムーラン・ルージュなど日本人のイメージするフランスの景物を配し、富士山の見える手前側に腰かけた洋装の婦人がそれを遠望するというデザインとなっています。タイトルの赤、背景の白、ページ下部の帯状の青でトリコロールを表し、言語を選択する際に表示されるトンボの画像で日本を表しています。トンボは、古くは「あきつ」と呼ばれ、『古事記』や『日本書紀』には日本の象徴として登場します。19世紀のフランスでジャポニスム（日本趣味）が流行した際には、エミール・ガレらの芸術家によって、トンボをモチーフとした作品が数多く製作されています。

フランス国立図書館の電子展示会 「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」



国際シンポジウム「日仏交流の過去と現在—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から」におけるヴェロニク・ベランジェ氏の報告をもとに、フランス側の電子展示会をご紹介します。

フランス国立図書館には、18世紀以来、東洋の書物の巨大なコレクションが構築され、1795年には敷地内に東洋語学校が設立されるなど、東洋学研究の一大拠点となってきました。1863年には、フランスにおける日本学の開祖となったレオン・ド・ロニーによって、日本語の講義が開始されています。その前年、ロニーは、江戸幕府の使節団の一員としてフランスを訪れた福沢諭吉らに図書館を案内しています。

電子展示会「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」は、フランス国立図書館の豊富な日本関係資料を背景に、これらの資料へのポータルサイトとなることを企図して作成されました。取り上げた資料は、写本、刊本、古写真、版画（浮世絵やその影響を受けたフランス人版画家による作品）、地図、工芸品（能面等）、録音資料など、多様な形態にわたります。対象となる時代も、マルコ・ポーロの『東方見聞録』から岡倉天心の『茶の本』の最初の翻訳まで、非常に長期間に及んでいます。

フランス国立図書館の日本関係資料には、目録が作られていなかったものも多くありますが、今回のプロジェクトを機に目録整備が進み、かなりの規模



「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」 <http://expositions.bnf.fr/france-japon/>

のデジタル化も実施できました。

ウェブサイトの構成について、もう少し具体的に紹介しますと、例えば「テーマ別に見る」というコーナーの「イメージの中の日本人」のページでは、古写真や浮世絵が見られます。鎖国時代にオランダ人によって描かれた絵画であるとか、明治時代に輸出品のために作られたポスターなどもあります。このほかにも、資料の内容に即して、いくつかのテーマが立てられています。また、検索機能についても充実させました。例えば、「Hokusai」という語で検索をかけますと、葛飾北斎に関する書物や北斎工房の絵画、《富岳百景》の最初の版やエドモン・ド・ゴンクールによる北斎の伝記などが表示されます。

そのほか、重要な資料として、版画家アンリ・リヴィエールによる有名な《エッフェル塔三十六景》もデジタル化して紹介しています。連作浮世絵やジャポニズムの時代の有名な雑誌『芸術の日本』などととも、「アルバム」というコーナーに収めています。



ヴェロニク・ベランジェ氏

フランス国立図書館日本資料担当司書。フランス国立古文書学校において日本書誌学を専攻。2000年に国立国会図書館において受託研修を受講。2001年からフランス国立図書館司書として、『酒飯論絵巻』研究プロジェクト等に参画。『『酒飯論絵巻』の世界：日仏共同研究』（共著）など。

今回のプロジェクトをきっかけに、フランス国立図書館の日本関係資料のデジタル化が進んだこと、関連分野の専門家たちの間にネットワークが生まれたことは大きな成果と言えます。来年も引き続き作業を実施し、ポータルを拡張します。日本語ページも設けていますので、この機会にフランスにおける日本のイメージに触れていただければと思います。



「フランスと日本 ひとつの出会い 1850-1914」より



フランス国立図書館とは…

1368年に設置された国王シャルル5世の私文庫にさかのぼる長い歴史を有する図書館です。フランスでは、1537年に国王フランソワ1世によって法定納本制度が開始され、現在約1,400万点の資料・約2,400名の職員を有する世界有数の図書館となっています。首都パリのフランソワ・ミッテラン館（本館）、リシュリユール館（手稿、版画、地図、古美術等を所蔵）を中心に、4つの図書館で構成されています。

国際シンポジウム

「日仏交流の過去と現在

—国立国会図書館・フランス国立図書館の所蔵資料から—



国際シンポジウムでは、国立国会図書館とフランス国立図書館から、それぞれ電子展示会の作成について報告があった後、日仏交流史の専門家を交えてパネルディスカッション「日仏交流の諸相—近代的制度、産業技術と芸術文化を中心に」が行われました。

ディスカッションへの導入として、コーディネータの三浦信孝氏によるショートスピーチ「日本の近代化とフランスの影響」が行われました。

日本の近代化とフランスの影響

2014年は、日仏会館の創立90周年にあたります。日清・日露の戦争を経て、条約改正を果たした日本は、アジアにおけるさらなる権益拡大を求めて第一次世界大戦に参戦しました。パリ会議後に成立した国際体制において、新たな強国として登場した日本を重視して、フランスは文化外交・学术交流の可能性を探ります。1921年には、詩人外交官として知られたポール・クロードルが駐日大使に着任していますが、当時の日本をめぐる国際環境を考えると、日英同盟の廃止、ドイツとの戦争、ロシア革命、米国における排日機運の高まりなどから、フランス





三浦信孝氏

中央大学教授。フランス文学・思想専攻。『近代日本と仏蘭西：10人のフランス体験』（編著）など。

がプレゼンスを高める余地があったわけです。クロードルにとって、フランス領インドシナの極東学院に次ぐ文化拠点をアジアに確保することは、優先度の高い課題でした。

さて、日仏会館の創立にあたり財政面で支援したのが、実業界の大御所・渋沢栄一でした。渋沢は、1867年のパリ万国博覧会に幕府が派遣した使節に随行しています。この体験をもとに日本資本主義の父となり、また民間外交の推進者となるわけです。

明治時代に来日したピエール・ロチ以来、日本に魅せられたフランス作家は数多いのですが、クロードルほど日本に影響されて自分の作品を書いた作家はいなかったと思います。彼が創立に関わった日仏会館は、90年の歴史を通じて、両国の相互理解に多大な貢献をしてきました。

日仏修好通商条約から第一次世界大戦のころまでを日仏交流における第1期、日仏会館の創立にはじまる両大戦間期を第2期、戦後を第3期とみることができます。日仏会館では、これまで第1期と第2期の交流について、それぞれ人物に焦点をあててシンポジウムを開催してきました。第1期には渋沢栄一、西園寺公望、中江兆民、黒田清輝、永井荷風、

第2期には大杉栄、九鬼周造、藤田嗣治、金子光晴、横光利一、岡本太郎らが重要な役割を果たしています。これらの人物については、国立国会図書館の電子展示会で紹介されていますので、ぜひご覧ください。

幕末・明治期の日仏文化交流について—フランスからの技術移転

パネルディスカッションの冒頭、西堀昭氏から幕末・明治期のフランスからの技術移転に関する報告がありました。

フランスからの技術移転の中心に、ちょうど2015年に、建設が始まってから150年を迎える横須賀製鉄所（造船所）があります。横須賀製鉄所は、その準備工場のような位置づけで建設された横浜製鉄所と合わせて、フランスから技術導入をおこなった生野鉦山や富岡製糸場の建設・運営を支えました。

横須賀製鉄所や生野鉦山は、付属の学校をもち、フランスからの技術移転が教育とセットになったものであったことがわかります。フランスの高等専門教育機関であるグランド・ゼコールから卒業生が各分野に技術者として招かれ、指導にあたりました。



西堀昭氏

横浜国立大学名誉教授。日仏交流史専攻。『日仏文化交流史の研究：日本の近代化とフランス』など。

生野鉦山の学校からは、後に画家として活躍した高島得三（北海）が出ています。また、富岡製糸場は学校も併設した伝習工場であり、ここで学んだ女性たちが各地の製糸業の発展に寄与しています。このように、技術移転にあたっては人材育成が非常に重視されていたことがわかります。

2014年6月にユネスコ世界文化遺産に登録された富岡製糸場では、横須賀製鉄所の製図工であった川島忠之助が通訳として活躍しました。川島は、後にジュール・ヴェルヌの『八十日間世界一周』を翻訳していますが、これは日本で最初のフランス語からの文学作品の翻訳です。このように教育とセットになった技術移転の影響は、各分野に及んだのです。

和古書から日本文化を知る—フランスでの和古書の調査、展示、出版と研究活動

続いて、クリストフ・マルケ氏からフランスにおける和古書コレクションに関する報告がありました。

私の所属機関であるフランス国立東洋言語文化研究学院（INALCO）は、ベランジェさんの報告にもありましたとおり、1863年にフランスで最初に日



クリストフ・マルケ氏

フランス国立東洋言語文化研究学院（INALCO）教授。日本美術史・出版文化史専攻。『日本の文字文化を探る：日仏の視点から』（編著）など。

本語教育を始めた機関になります。本日は、フランス人が和古書を通じて日本について学んできたという側面について報告したいと思います。

フランスにおける和本の収集は、日本語教育の開始以前に始まっています。19世紀前半にコレージュ・ド・フランス(Collège de France)の中国語教授であったアベル・レミュザの蔵書には、すでに絵入り事典『^{きんもろうずい}訓蒙図彙』等数点の和本が含まれていました。これらは、オランダ人を通じて入手したようです。

現在のフランス国立図書館の和本コレクションは、ベランジェさんのいらっしゃる写本室に1740年代以降に収集された絵巻、奈良絵本、写本、版本等が約800点（1,800冊）あり、その中にはシーボルトの旧蔵書の一部も含まれています。また、版画室には、パリで和本を入手しやすくなった1840年代以降に購入されたり、寄贈された版本約3,500冊が所蔵されています。この中には、ジャポニズム時代の代表的な絵入り本コレクションであるデュレ・コレクションや江戸文学の研究のために構築されたトロンコワ・コレクションが含まれます。トロンコワは、明治時代半ばに10年以上日本に滞在し、黒田清輝らと交流したことが知られています。

私は、20年以上前からフランス各地の図書館における和本関係の展示会に関わってきました。特に、2007年にフランス国立図書館で開催された「禁書」の展示会には、日本の春本を出展し大きな反響を呼びました。フランスでは、パリ装飾美術館図書室、パリ国立美術学校図書室、ギメ東洋美術館図書室、大学間共同利用言語・文化図書館（BULAC、旧INALCO図書館）等にも、和本のコレクションが所蔵されており、日本の研究者の協力も得ながら、目録の整備に取り組んでいます。また、出版社と協力して、日

本の絵本（絵入り本）のフランス語訳・複製出版にも取り組んでいます。研究の面では、日仏会館を拠点に日仏共同研究を実施し、その成果を刊行しています。

今後の課題としては、フランスの和本総合目録の整備やデジタル化の実施が挙げられます。今回の共同電子展示会の作成により、デジタル化が進んだことは喜ばしいことです。一次資料を活用した研究が進展することを願っております。

フランス国立図書館蔵『酒飯論絵巻』の共同研究プロジェクト

続いて、マルケ氏の報告のケーススタディとして、ベランジェ氏から『酒飯論絵巻』の日仏共同研究に関する報告がありました。

『酒飯論絵巻』は、室町時代に成立した絵巻物で、「上戸」と言われる酒好きの人、「下戸」と言われる飯好きの人、どちらもほどほどに嗜む「中庸の徳」を説く人の3者がそれぞれ持説を述べあうという内容の、パロディ的な要素を含む作品です。2010年からフランス国立図書館の研究プログラムに採択され、INALCO等フランス国内の機関や名古屋大学をはじめとする日本の大学からも参加を得て、3年間の共同研究を実施しました。その成果は、日本とフランスで刊行されています。

フランス国立図書館所蔵の写本は、特に重要なもので、現在では失われた狩野元信による原本に忠実な写本とされています。共同研究には、食文化や美術史、文化史など幅広い分野の研究者が参加し、描かれた食事の図から当時の食生活を読み取るなど、まさに、共同研究ならではの豊かな成果が得られたと思います。

その後、参加者からの質問にパネリストがコメントする形で討議が進められました。フランスに日本美術を紹介した林忠正の活躍や日仏相互の関心の非対称性などが話題となりました。



本稿でご紹介したとおり近代日本とフランスの交流は、広いすそ野をもっています。両国関係を振り返る際の基礎資料として、共同電子展示会をご活用いただければ、これに勝る喜びはありません。



シンポジウムのプログラム

報告1 日本におけるフランスのイメージの形成—電子展示会「近代日本とフランス—憧れ、出会い、交流」の紹介
渡邊幸秀（国立国会図書館利用者サービス部司書監）

報告2 フランスにおける日本文化受容の一側面—フランス国立図書館の電子展示会プロジェクト
ヴェロニク・ベランジェ氏

ショートスピーチ 日本の近代化とフランスの影響
三浦信孝氏

パネルディスカッション 日仏交流の諸相—近代的制度、産業技術と芸術文化を中心に

コーディネータ：三浦信孝氏

パネリスト：ヴェロニク・ベランジェ氏、クリストフ・マルケ氏、西堀昭氏、渡邊幸秀



なお、在日フランス大使館のご厚意により、「アンスティチュ・フランセ関西／京都」所蔵の作家のサイン本等を会場前に展示しました。

シンポジウムの資料を以下のURLに掲載しています。
<http://www.ndl.go.jp/jp/event/events/20141211lecture.html>

CONTENTS

- 02 <Book of the month - from NDL collections>
Kōkyō shōkai: Original book different from the reprint
- 04 Focus: Overlooking the history of Japanese-French exchanges through collections
- 05 Digital exhibition by the NDL “Modern Japan and France — adoration, encounter and interaction”
- 08 Digital exhibition by Bibliothèque nationale de France “France-Japon: Une rencontre, 1850-1914”
- 10 International Symposium: Past and Present of Japanese-French Exchanges— from the Collections of National Diet Library and Bibliothèque nationale de France
- 14 Meeting “well-known people” at the NDL ! : Report on exhibition “Autograph manuscripts and original artwork of well-known people”
- 18 Exhibition “Autograph manuscripts and original artwork of well-known people” Floor lecture on the monthly bulletin
- 23 Holding and reutilizing small exhibitions in the Kansai-kan

- 17 <Tidbits of information on NDL>
NDL on Facebook: NDL's exhibition (Tokyo Main Library and Kansai-kan)
- 26 <Books not commercially available>
○ *Shirarezaru sekai e no chōsen: Kōkai, tanken, hyōryu o shirushita shomotsu hyakusen: Gakkō Hōjin Kyoto Gaikokugo Daigaku sōritsu 65shūnen kinen kikōsho tenjikai: Tenji mokuroku*
○ *Kanchō Anno Hideaki tokusatsu hakubutsukan: Minichua de miru shōwa heisei no waza*
- 28 <NDL News>
○ 5th meeting of the Council on Organization of Science and Technology Information
○ 5th mutual visit program with the National Assembly Library of Korea and the National Assembly Research Service
- 30 <Announcements>
○ Scripts Archives Symposium commemorating the 90th Anniversary of broadcasting “Scripts Archives taking a new step: Preservation and use for the future”
○ Book notice - Publications from NDL

国立国会図書館月報

平成27年2月号 (No.647)

平成27年2月20日発行 定価540円
(本体500円)

発行所 国立国会図書館

編集責任者 小寺正一

〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
FAX 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp発売 公益社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)
FAX 03 (3523) 0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社ブルーホップ

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。
本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜粋して転載される場合には、事前に当館総務部総務課にご連絡ください。
本誌517号以降、PDF版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) >刊行物>国立国会図書館月報でご覧いただけます。



『省亭花鳥』から「蒨葦に鶯」
渡辺省亭 画 大倉書店 大正5（1916）年
1冊 28×39cm
「国立国会図書館デジタルコレクション」でご覧になれます
（モノクロ画像）
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966613/5>

国立国会図書館月報

平成27年2月20日発行（毎月1回20日発行）
（2月号通巻647号）

発売：公益社団法人 日本図書館協会 定価540円（本体500円）